「ガイダンス 確率統計」正誤表

初版 1 刷，2 刷，3 刷，4 刷の正誤表 （2025 年 4 月 14 日）

東京都立大学の松山洋教授，酒井裕司さんには 4 刷発行後に誤りをご指摘頂きました．ここに謝辞を述べさせて頂きます．

頁	場所	誤	正
3	和事象と積事象の説明文	この和事象と積事象を内包的記法で表すと	この和事象と積事象をそれぞれ内包的記法で表すと
26	定義 2.1.4	(2.3) で与えられる離散分布があって，	(2.3) で与えられる離散分布が存在して，
33	定義 2.1.6	ある密度関数 $f(x)$ があって，	ある密度関数 $f(x)$ が存在して，
54	注意 2.3.5	ここで，$x \wedge y$ は x と y の小さい方，$x \vee y$ は x と y の大きい方とした．	ここで，$x \wedge y$ は x と y の最小値，$x \vee y$ は x と y の最大値である．
55	演習 2.2	約何 cm 以上あればよいか答えよ (表 C.1 を利用すること).	約何 cm 以上あればよいか答えよ. (表 C.1 を利用すること．)
55	演習 2.3	a は整数とし，	a は -1 と異なる整数とし，
55	演習 2.6	ただし $a \vee b$ は，$a \geq b$ のときは a であり，$a \leq b$ のときは b である．	ただし，$a \vee b$ は a と b の最大値である．
60	系 3.2.1 の証明	ここで，$a \wedge b$ は a と b の小さい方，$a \vee b$ は a と b の大きい方とした．	ここで，$a \wedge b$ は a と b の最小値，$a \vee b$ は a と b の最大値である．
64	定義 3.2.4	ある同時密度関数 $f(x, y)$ があって，	ある同時密度関数 $f(x, y)$ が存在して，
67	定理 3.2.1 [証明]	さらに，X と Y が独立であれば，X と Y の周辺密度関数 $g(x)$ と $h(y)$ に対して，	さらに，X と Y が独立であれば，X, Y の周辺密度関数 $g(x), h(y)$ に対して，
74	例 3.2.4	このことから，相関の強弱を -1 以上かつ $\cdots$	このことから，相関の強弱は -1 以上かつ $\cdots$
98	演習 3.1	ただし $X_1 \vee X_2$ は，$X_1 \leq X_2$ のときは X_2 であり，$X_1 \geq X_2$ のときは X_1 である．	ただし，$X_1 \vee X_2$ は X_1 と X_2 の最大値である．
99	演習 3.6	ただし，$X \wedge Y$ は X と Y の小さい方，$X \vee Y$ は X と Y の大きい方とする．	ただし，$X \wedge Y$ は X と Y の最小値，$X \vee Y$ は X と Y の最大値である．
118	定理 5.1.3	実数 μ と正の定数 $K < \infty$ があって，	実数 μ と正の定数 $K < \infty$ が存在して，

頁	場所	誤	正
124	命題 5.2.1 の証明	ただし，$N_1 \vee N_2$ は N_1 と N_2 の大きい方とする．	ただし，$N_1 \vee N_2$ は N_1 と N_2 の最大値である．
127	定理 5.2.2 の証明 : (5.60) 式	$\frac{n!}{k!(n-k!)}p^k q^{n-k} \quad \approx$	$\frac{n!}{k!(n-k)!}p^k q^{n-k} \quad \approx$
130	定理 5.2.3 の証明 : $h_n(t)$ の定義	$(t > -\sqrt{n})$	$(t \geq -\sqrt{n})$
130	定理 5.2.3 の証明 : $h_n(t)$ の定義	$(t \leq -\sqrt{n})$	$(t < -\sqrt{n})$
130	定理 5.2.3 の証明	自然数 n を十分大きく取れば $t > -\sqrt{n}$ をみたすため，	自然数 n を十分大きく取れば $t \geq -\sqrt{n}$ をみたすため，
158	7.1 節	このように，H_0 を棄却するか，受容するかの判定を行うことを	(改行に伴う空白) このように，H_0 を棄却するか，受容するかの判定を行うことを
169	(7.50) 式	$\widetilde{T}_n{:}=\frac{\sqrt{n}(\overline{p}_n-p)}{\sqrt{p(1-p)}}$	$\widetilde{T}_n=\frac{\sqrt{n}(\overline{p}_n-p)}{\sqrt{p(1-p)}}$
170	7.4 節 (2 箇所)	次の 2 つの同値関係が近似的に成り立つと考えてよい．	次の 2 つの必要十分条件が得られると考えてよい．
171	7.4 節	次の 2 つの同値関係が成り立つ．	次の 2 つの必要十分条件が得られる．
178	定理 A.2.1 の証明	ここで，$k \wedge l$ は k と l の小さい方，$k \vee l$ は k と l の大きい方とする．	ここで，$k \wedge l$ は k と l の最小値，$k \vee l$ は k と l の最大値である．
179	補題 A.2.1	ここで，$k \wedge l$ は k と l の小さい方，$k \vee l$ は k と l の大きい方とする．	ここで，$k \wedge l$ は k と l の最小値，$k \vee l$ は k と l の最大値である．
208	A.17 直行行列の基本性質・正規直交化法	定理 6.1.2 (基本的な統計量の標本分布に関する結果) で証明で必要となる，「直交行列の基本性質」(命題 A.17.1) と	定理 6.1.2 (基本的な統計量の標本分布に関する結果) の証明で必要となる「直交行列の基本性質」(命題 A.17.1) と